広島大学附属三原学校園研究紀要　第１集　2011　pp. 33-40

保　育

交流活動における教師のかかわり方について

—年長児と４年生の交流を通して—

掛　志　穂

１，はじめに

本学校園では 1998 年から幼小中一貫教育をおこなっており，中でも年長児と４年生との交流は一貫教育当初より続けられている活動である。年長児のときに４年生と交流をした学年が４年生になり，今度は自分たちが年長児と交流をするというサイクルになり 10 年になる。この交流活動は，子どもたちだけでなく保護者も楽しみにしているほど定着してきた。2008 年に改訂された幼稚園教育要領の中にも幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続[1)]が強調され，「小学校教師と幼稚園教師との意見交流などを通じて幼児と児童の実態や指導の在り方について相互理解を深めたり，幼児と児童が交流するなど，小学校との連携や交流を図ること」[2)]が必要であるとされている。

そこで，本学校園が以前から行っている幼小中一貫教育での年長児と小学４年生との交流において，幼稚園教師と小学校教師の連携の在り方や子どもたちの姿をどう捉えどうかかわっているかなどの子どもたちへのかかわり方を探っていきたい。

２，研究の構想

(1) めざす子どもの姿

本学校園では，「新しい環境において身近な人や学級集団に親しみ，自分や相手の思いを感じながら，自分の思いを相手に伝えたり相手の思いを受け入れたりする」力の育成のひとつとして，年長児と４年生が交流を行っている。これは，年度当初固定のペアをつくり年間通してそのペアとの交流を深める交流活動である。

その中での年長児の具体的なねらいは次の３つである。

- お兄ちゃんお姉ちゃんと一緒に遊ぶ楽しさを知る
- お兄ちゃんお姉ちゃんに自分の思いを伝えたり，思いを受け入れてもらったりする喜びを味わう
- お兄ちゃんお姉ちゃんと一緒に遊んだり，受け入れてもらったりすることに感謝の気もちをもつ

(2) 具体的方策

年長児と４年生の交流において，幼小中一貫教育の積み上げから，１年間に４～５回の交流活動が定着してきた（表１）。それぞれの活動ごとにねらいを設定し教師のかかわり方を考え４年生担任との連携を密にして実施する。活動ごとの子どもの感想や姿から教師のかかわりが適切だったかどうかを振り返っていく。なお，活動内容は年長組担任と４年生担任が互いに話し合いながら，１年間の見通しをもってねらいやおおまかな道筋を決めておく。具体的な活動については，年長児や４年生が考えを織り交ぜながら話し合って決めていく。

①出会いを楽しむ活動
②かかわりを楽しむ活動
③よりかかわりを深める活動
④力を合わせることを楽しむ活動
⑤小学校へむけてペアとの絆を深める活動

表１　年長児と４年生の年間の交流活動

３，実践事例

(1) 出会いを楽しむ活動（５月19日）

○ ねらい：自分のペアの顔と名前を覚え，一緒に遊ぶことに楽しさを感じる。

○ 活動：顔合わせ・一緒に遊ぶ

○ 場所：遊戯室・保育室・園庭

○ 年長児への事前のとりくみ

交流の前に次のことを話した。「年長になると４年生との交流がはじまり，みんなには４年生のお兄ちゃんお姉ちゃんができること」「１年生にあがるまで，ときどき一緒に遊んだり運動会で踊ったりして楽しい活動をすること」「みんなと一緒に遊ぶことをお兄ちゃんやお姉ちゃんはとても楽しみにしていること」など。そして，子どもたちも交流を心待ちにするような雰囲気を作っていった。

○ ４年生担任との事前の連携

交流の目的を確認しあい，年間固定となるペアを各クラスの子どもの様子を考慮しあいながら決めていった。また，顔合わせの日は初めての出会いなので，園児が安心して出会えるように慣れている場所にしたいと話し，遊戯室となった。交流当日の確認として，かかわっている様子をまずは見守ること。困っているペアがあれば声をかけかかわれるようにすることとした。

○ 交流の実際

年長児と４年生は遊戯室に集合した。４年生の総合係の合図で４年生が年長児のペアの名前を呼びながらペアを見つけ，手をつないで次々とペアをつくっていった。

その後，年長児は４年生から自己紹介カードをもらうと，喜んで大事そうに見ていた。どの子も嬉しそうにはしているが，まだ緊張気味の様子であった。それから，ペア同士で一緒に遊び交流を深めた。何をして遊んだらいいのか思いつかないペアには「折紙してみる？」「お姉ちゃんの名前をきいた？」など声をかけ，かかわれるきっかけをつくっていったが，まだペア間の距離は少し離れていた。別れ際に「ばいばい，またね」とにこやかに手をふる姿からは，少しは緊張がとけた様子も見られた。

○ ４年生担任との事後の連携

・子どもたちの姿から見えたことを交流

子どもたちは初めての出会いに緊張しながらも，ほとんどの子どもはペアの４年生と一緒に遊ぶことを喜んでいた。その後の感想からも「また遊びたい」「一緒にブランコしたのがたのしかった」「明日も遊べるの？」などと交流が楽しかったこと，そしてこれからも交流を楽しみにしていることが伺えた。

・かかわりが気になったペアのことを交流

互いの子どもの様子を出しながら，今後のかかわり方を考えていった。次回の教師のかかわりとして，「困ったことがあったらまずはペアの４年生に相談すること。それが難しいなら先生に相談すること」とした。

・かかわり方の見通しを話し合う

かかわりの度合いはペアにより様々なので，ペア同志の気持ちを教師が代弁するなどの配慮もしながら，あせらずこつこつと積み上げていくことを話し合った。

【考察】

子どもたちの感想や姿から，交流を心待ちにする雰囲気をつくるというかかわりや，子どもの様子によっては，始めはペア同士の気持ちのやりとりを教師が代弁するというかかわりが必要だと考えられる。

図１　気になる距離の年長児とペアの４年生

(2) かかわりを楽しむ（６月・幼小中合同運動会）

○ ねらい：ペアの４年生に運動会で一緒に踊る踊りを教えてもらうことを通して感謝を感じながら，ペアの４年生と一緒に踊ることを楽しむ

○ 活動：運動会で一緒に踊るリズムを４年生に教えてもらいながら練習する。お礼の絵やプレゼントを渡す。

○ 場所：遊戯室・中学校体育館・中学校グランド

○ 年長児への事前のとりくみ

運動会で４年生と一緒に踊る曲「ドラえもん」は子どもたちもよく知っている曲である。朝からこの曲を流し楽しい雰囲気を作っておいた。子どもたちが自然に歌い始めた頃，この曲で運動会の踊りをすることとそれをペアの４年生と一緒に踊ること，踊りをペアの４年生が教えにきてくれることを伝えた。

○ ４年生担任との事前の連携

踊りは一気に進めるのではなく，少しずつゆっくり覚えながら進めてほしいということをお願いした。また，踊りを上手に踊ることも最終的にはめざすが，踊りの練習を通してペア同士のかかわりを深めることに重点をおくことを確認しあった。

○ 交流の実際

＜初練習＞

１回目の交流では４年生のペアと何事もなく過ごしていたＡ女。朝から表情が硬いのが気になり「今日は４年生のお兄ちゃんとお姉ちゃんがきてくれるね」と言うとさらに顔がこわばった。かなり緊張していると思い様子を見ることにした。４年生は運動会で一緒におどる踊り「ドラえもん」を教えにきてくれた。

総合係「では，ここまで一緒に踊ってみましょう」

Ａ女「うわーん！」と大声で泣き出した。

ペア「・・・」どうしようとおろおろしている

「Ａ女ちゃん，今日はね，いっしょにドラえもんおどろうね。」

Ａ女，首を横にふりながら泣く。ペア，教師にどうしたらいいの？という表情を向けた。

教師「Ａ女ちゃん，どうしたの？」

Ａ女「せんせいがいい。」

教師「そう。でも今日はせっかくお姉ちゃんたちがきてくれてるから，踊りを教えてもらおうよ。」

Ａ女「いやだ。せんせいがいい。」

と言って泣き続ける。ペアの４年生には少しそこで待ってもらうようにし，遊戯室からそうっとＡ女を連れ出して落ち着かせるため話をした。

教師「ほら，みんなおどってるよ。楽しそうだなあ。Ａ女ちゃんも一緒におどろうよ。先生も一緒にいるから大丈夫だよ。ほら，お兄ちゃんもお姉ちゃんも待ってくれてるよ。」

ペアの４年生にはにこにこしながら踊っているように頼んでおいた。

教師「一緒にいてあげるから大丈夫。行ってみようか」

と言ってそうっとＡ女と手をつなぐとＡ女が動き出した。その後，その活動が終わるまで教師がそばについていた。Ａ女は泣かずに少し踊った。しかし，終始今にも涙が出そうな表情だった。

図２　「せんせいがいい」

図３　「せんせい，ちかくにいる？」

○　Ａ女へのとりくみ

４年生の手本を見た後，いざ自分たちが踊るときになって突然泣き出したＡ女。初めて踊る踊りに抵抗を感じて泣き出したのだと捉えた。しかし，かたくなに「せんせいがいい」と言って泣き止まなかった姿は，「ちゃんと踊りたいのに踊れないのがいやだ」「お兄ちゃんやお姉ちゃんが見ているのに踊れないのは恥ずかしい」など，Ａ女のいろいろな気もちが織り交ざって表れた姿だと捉えた。そこで，「自信をもって踊れるようにクラスでも機会をみて楽しく練習をする」「ペアの４年生との距離を縮めるには時間がかかりそうなので，あせらず安心して活動ができるように傍で見守る」「少しずつ自信がもてるようかかわる」ことにとりくんでいった。合わせて保護者にも様子を知らせ気づきがあったら伝えてもらうようにした。保護者からは「初めてのことにはすごく時間がかかるタイプで，どちらかというと完璧を求める。だから踊れないことを見られるのは嫌なんだと思う。お兄ちゃんというのも出会ったことがないので苦手のようだ」という思いを告げられた。そこで，ペアのお兄ちゃんに好意をもてるように，踊りの練習のあと一緒に遊ぶ時間を作ったり，時々Ａ女との距離をとり，教師がいなくてもがんばれたという思いをもたせたりして，だんだん自信をもてるようにとりくんだ。

○　４年生担任との連携

・Ａ女へのかかわり

まずＡ女が安定することが大事なので，教師が間に入りながら徐々に引いていく形をとりたいということを伝えた。

・ペアの４年生へのかかわり

４年生担任からはＡ女の思いを年長児担任が直接ペアの４年生に伝えてほしいということであった。そのほうが４年生がＡ女へのかかわり方がよくわかるということであった。

・意欲を高める

クラスの子どもたちの感想を伝えあい，次の練習への意欲に高めるようにしていった。

図４　「なんとかおどったよ」

【考察】

Ａ女は不安な気もちをもちつつも，その場から逃げずにペアの４年生と一緒に過ごすことはできている。これはＡ女の努力の姿である。教師が傍にいて安心感をもたせることと，短時間でもペアの４年生と遊ぶ時間をつくり一緒にいることに徐々に慣れていくこと，保護者にも協力をお願いしＡ女の努力を認めていってもらうことなどが，Ａ女の心の中にあるペアの４年生への抵抗感を和らげることにつながっていっていると感じた。また，教師が様子を見てＡ女の傍からだんだん離れ，それでもがんばれたＡ女の姿をほめることにより，Ａ女自身にもだんだん力をつけていくことになっていると感じた。

(3)　よりかかわりを深める（10月）

○　ねらい：一緒に買い物や遠足に行くことを通して，自分の思いを伝えたりペアの４年生の思いを感じたりして一緒に遊ぶことを楽しむ。

○　活動:遠足にいくためのおやつを一緒に買う。
　　遠足に行く。
○　場所：近所の大型スーパー・公園
○　年長児への事前のとりくみ

４年生がかかわりを深めるために計画をしてくれたことに喜びを感じられるような声かけをしていった。また，全てを受身的に待つのではなく，自分たちにもできることや考えられることがあるのではないかということを投げかけ，自分たちのやりたいことや４年生への質問などをまとめ，代表して担任が４年生に聞くことにした。合わせて，学園外に出るということで交通ルールについてやお店でのマナーなど，何に気をつけたらいいかということも話し合った。そして何よりもペアとはどう行動したらよいかも話し合った。その中で出たことは次のことである。

・手をつないでいく。
・お店では大声を出さない。
・わがままを言ってお兄ちゃんやお姉ちゃんを困らせない。
・困ったときはお兄ちゃんお姉ちゃんに言う。言えないときは先生に言う。

Ａ女については，何に気をつけたらいいかなどは，周りの子どもと一緒になって「手をつないでいく」とか「お店では大声を出さない」などと言っていたので，運動会のときほどの緊張感や抵抗感はないと捉えた。そこで，なるべく楽しいことがあるという雰囲気を出すようにした。また遠足では，みんなで遊べるということを強調して楽しみにできるようにしていった。

○　４年生担任との事前の連携（買い物のとき）

・できるだけ会話をすることを通してかかわりを深めてほしい。
・手をつなぐこと。安全面からと会話がうまれるという期待から。
・４年生から「遠足のとき何をして遊びたいか」という質問をする。それをきっかけにかかわりが深まるといい。

○　交流の実際（買い物のとき）

＜買い物に行く＞　10月６日

運動会後のプレゼントのお礼に，４年生が「一緒に遠足にいきましょう」と誘ってきた。大喜びの子どもたちは，まずはおやつをペアの４年生と一緒に近所の店に買いに行った。楽しそうに会話をしているペアがある中で，険しい表情のペアがいた。Ａ女である。店に着きお菓子を買いに行くとき，ペアのお兄ちゃんとお姉ちゃんはＡ女を真ん中に入れて手をつなぎお菓子コーナーを歩いていた。

４年生「Ａ女ちゃん，このお菓子はどう？」
Ａ女，無言で行きたいほうへさりげなく手を引っ張って行く。ペアの４年生もＡ女の行きたいところへ引っ張られていく。

保育室に戻って感想を聞いた。

教師「買い物はどうでしたか？」
Ａ女「たのしかった」
教師「何をしたのが楽しかったの？」
Ａ女「すきなおかしをかったのがたのしかった」

図５　「こっち」と手をひっぱる

○　４年生担任との事前の連携（遠足のとき）

・自分からかかわりを求める工夫

受身的な子どもが自分からかかわりを求められるような場や持ち物，時間，過ごし方などについて話し合った。

・場所について

遠足に行く場所は４年生が最初考えていたところは少し遠いところで，時間的に現地であま

り遊ぶ時間はなく，手をつないで歩くことが主になる場所であった。そこで，子どもたちはペアの４年生とたっぷり遊びたいという欲求をもっていることを伝え，手をつないで長時間歩くことよりも一緒にたくさん遊べる近くの公園を提案した。かかわりを深めるという目的にそのほうがかなっているのではないかということで，４年生に再度もちかけてもらった。

・持ち物について

ペア同士の会話がはずみ仲良くなるために，また，かかわりあえる工夫として，シートは子どもたちとペアの４年生どちらもが用意するのではなく，子どもたちのものを一緒に使うとかおやつは一緒に食べるなど事前に教師同士が話し合っておき，これらのことも４年生に考えさせることにした。

○　交流の実際（遠足のとき）

＜遠足に行く＞　10月12日

城跡公園まで手をつないで歩いて行き，まずはシートを広げておやつを食べた。その後，自由に遊んで帰った。

Ａ女のペアの４年生はＡ女の友だちのペアの４年生も一緒にシートを広げていた。Ａ女は友だちのペアのお姉ちゃんが気になって様子をうかがっている。それにはお構いなしにＡ女の友だちと友だちのペアの４年生はお菓子を広げながらその場を盛り上げていた。Ａ女の表情は柔らかくなっている。しばらくして

Ａ女「キャー！」

友だち「キャー！」

思いっきり笑顔で走っている。

４年生「まてー！」

後からペアの４年生たちが追いかけている。おにごっこをしているようだ。とても生き生きとした表情だった。

＜遠足後の感想＞

Ａ女「おにごっこがすっごいたのしかった！おかしもおいしかった！」

教師「もう涙がでなかったね」

Ａ女「うん！」

図６　友だちのペアの４年生に興味をもつ

○　４年生担任との事後の連携

Ａ女の生き生きとした姿から，次回はグループ活動をとり入れて，ペア同志のかかわりをふやしてみようということになった。

【考察】

買い物の場面では，会話はないもののつないだ手でＡ女とペアの４年生はお互いの思いを感じ取っていた。「会話をすることでかかわりを深めよう」と考えて４年生担任と連携をとっていたが，子どもたちの実態から会話だけがかかわりを深める手段ではないということを改めて感じさせられた。思いを言葉にして伝えることは今後必要となってくるが，そのことを気にしながらも，今は一緒にいることに喜びや楽しさを感じることが大事なのだ。その方法は手をつないでいるときのぬくもりや強さであり，気持ちが通じ合っているときに一緒に感じた風や笑い声やその場の空気である。複数のペアで遊ぶことと公園，お菓子などのいくつもの要因が重なって，Ａ女の心を解放し本来の姿でペアの４年生と接することができたのだと考える。

(4)　力を合わせることを楽しむ（11月）

○　ねらい：クリスマス会やその準備を一緒にすることを通して，協力する楽しさを味わう

○　活動：クリスマス会の諸準備・クリスマス会

○　場所：遊戯室

○　年長児への事前のとりくみ

・クリスマス会の飾りを作ることに意欲を高める工夫

普段の遊びの中で普通の大きさのまつぼっくりツリーを作ってその楽しさを十分に味わった後，今度はもっと大きなツリーを作ろうと園庭のダイオウマツのマツボックリを提示し，特別のツリーにする意欲を高めていった。ただ，大きなツリーのため一人では難しいのでペアの４年生が一緒につくってくれることになったと，ペアの４年生と一緒に活動することに喜びがもてるように語っていった。

○　４年生担任との事前の連携

・年長児が自覚をもてるようにかかわる

一つの活動を力を合わせて一緒に行うことにより，甘えることの多かった姿から自分の力を発揮できる姿となるような活動のあり方を話し合っていった。自分でできることは自分でし，力を合わせるところは声を掛け合いながらできるように様子を見守るということにポイントをおいてかかわることにした。また，時間の制約もあったが，クリスマス会のかざり作りから準備，後片づけまで，自分たちが主催するということを意識し，最後までやりきることを大事にしたいということを話し合った。そこで，作ることや遊ぶことばかりでなく，準備から片づけまで自分たちで協力してできるようにすることを確認した。

・年長児が活躍できる場の工夫

年長児が普段使っている材料のワゴンや用具，折紙棚などを遊戯室に運び，スムーズに活動できるようにした。

・各ペアがかかわりあえる工夫

各ペアがかかわりながらも活動しやすくするために，グループを構成し，材料の配置については人数が集まりすぎないように数箇所にわけることにし，材料を取りに行くときに他のグループの様子が自然と目に入るような配置にもした。

○　交流の実際

＜まつぼっくりツリーづくり＞11月21日

４年生のペアが保育室に呼びにきた。各ペアになりＡ女たちはにこにこしながら自分たちのまつぼっくりを手に持って遊戯室に集まった。材料などの説明を聞き，ツリーを作り始めた。

Ａ女は自分のほしい材料をペアと一緒に取りに行った。躊躇することもなく，どんどん選んでとっていく。時折，ペアがすすめる材料ももらっていた。３人でああしようこうしようと一生懸命まつぼっくりに向かっていた。

どのペアも真剣に飾り付けをしている。ペアの４年生が一緒にしてくれることで，素敵なツリーが仕上がっていっていることに「お姉ちゃんがいてくれてよかったねえ」などと声をかけながら感謝の気もちが自然にもてるようにしていった。また，各ペアでかかわりが深まるように，なるべく教師は前面に出ず，ペアの中でいろいろなことを解決できるように見守っていった。

片づけでは，誰一人文句を言う子どもはおらず，一生懸命ごみを拾ったり容器を洗ったりしていた。最後まで気持ちのよい活動になった。

図７　たのしいねー！

＜クリスマス会＞　12月16日

４年生が，先日ペアで一緒に作ったまつぼっくりにカードをそえて持ってきてくれた。お礼に子どもたちもこっそり作っていたサンタクロースのかざりを渡した。どちらも驚かそうという気持ちでプレゼントを作っていた。A女はカードをもらったことにもサンタクロースをあげたことにも喜びを感じている表情だった。

クリスマス会は遊戯室を飾るところからはじまり，運動会で踊ったドラえもんの踊りを一緒におどった。A女はこれ以上ないほどの笑顔で生き生きと踊っていた。最後まで笑いが絶えない活動だった。この時の片づけもみんなで声をかけあい，きれいに気持ちよく片づけることができた。

○　４年生担任との事後の連携

・教師の感性について

子どもたちの姿に素直に感動できる心を教師がもつことについて話し合った。例えば，最後まで自分たちで力を合わせて行うということができていたこと，お互いの子どもたちが，相手を驚かそう，喜ばそうという気もちをもっていたことである。また，子どもたちの様子を見て，任せることの大切さを再確認した。今後も子どもたちの気もちを受け止めながら活動をともに考えていくことを確認した。

・A女を見守ることについて

A女とペアの４年生については，あせらずじっくり見守ったことやグループで活動したことでお互いに自分らしさを出すことができたと振り返った。

【考察】

自分たちで主体的に動くことを大きなポイントにしていったことは，各ペアが成長するためにとても大事なことだと考える。交流も慣れてきて，ただ遊ぶだけではなく一緒に力を合わせることを仕組むことで，子どもたちなりに自分が役に立っている，必要とされているという思いをもつことができる。また，材料ワゴンや折紙棚など自分たちが普段使い慣れているものを使うことで活動に自信をもつことができていると捉えた。さらに，普段から行っている片づけについてもペアの４年生や教師だけに任せることなく，ほぼ全てを自分たちも力を出して片付けたことは，普段の生活がいきているといえる。教師は子どもたちが活躍できるようにかかわることがこの時期に大事なことと考える。

４，実践を終えて

４年生担任との連携を積極的に行うことができ，子どもたちが何を感じ何を学ぶことが大切か，そのためにはどうかかわったらよいかなどの大変重要なところの話し合いができたことは，今回の交流活動での大きな実りとなった。また，教師のかかわりを子どもの様子を見ながら，段階をおって子どもの実態に合わせていったことは大変重要であった。子どもたちに無理強いをすることなく，子どもたちの気もちを受けとめながら意欲をもたせながらすすめていくことは，教師自身も楽しく，交流を進めることができた。

今回の交流活動は，交流がただの活動に終わらず，子どもたちの姿から１年間の見通しをもったものになるための幼稚園教師と小学校教師の話し合いがされている点，またその内容が子どもをどう動かすかではなく，子どもが主体的にかかわるためにどうしたらよいのかを子どもの様子や言動から読み取り，子どもの姿を連携しながら，互いの子どもたちへの理解を深めていく点からも，教育要領で言われている幼小連携を行う上での教師同士の連携の姿であるといえるのではないだろうか。今後も子どもの姿をもとにした教師同士の連携を大事にしながら交流を積み重ねていきたい。

＜参考・引用文献＞

1)　文部科学省：「幼稚園教育要領」，p. 22，2008.
2)　神長美津子・岩立京子：「新幼稚園教育要領の展開」，p. 12，2009，明治図書.